

青年期女性の日常生活における人前での泣き場面 尺度の作成と関連要因の検討

栈敷若奈

(安田女子大学心理学部現代心理学科)

【研究の目的】

涙は情動表出の一形態であり、先行研究では家族の死やいじめなど非日常的で重大な出来事を含む泣きが扱われてきた(橋本他, 2006)。しかし、日常生活における泣き場面は十分に検討されていない。また、泣いている個人は、否定的な社会的反応にさらされるリスクが高い

(Vingerhoets, 2013)とされており、こうした反応を減らすためには、泣くことそのものに対する理解を深めることが重要であると考えられる。

本研究では、青年期女性を対象に、日常生活における人前での泣き場面尺度を作成し、泣きやすさのタイプを明らかにするとともに、過去の泣き経験や泣きに関する信念が青年期女性の泣きやすさや、我慢の可不可にどのように関連しているかを検討する。また、泣いた人がどのような関わりを求めているのかについても明らかにすることを目的とする。

【方法】

調査対象者：人前で泣いたことがある女子大学生 121 名 ($M = 20.77$ 歳, $SD = 1.56$)。

手続き：Google フォームを用いた質問紙調査。

質問紙の構成：フェイスシート(年齢、性別、涙の抑制傾向)、予備調査を基に作成した「日常生活における人前での泣き場面尺度」、日本語版 BEQ (Berkeley Expressive Questionnaire) (Lin et al, 2016)、J-DERS (Japanese version of Difficulties in Emotion Regulation Scale) (山田・杉江, 2013)、日本語版 BACS (Beliefs About Crying Scale) (白井他, 2023)、「泣くこと」の他者への影響について(澤田他, 2012)、泣いた際、他者からの関わりを必要とするか(自由記述)

倫理的配慮について：日常的な泣き場面に限定して実施した。不快感が生じた場合には回答を中断または撤回できる旨を明記し、心理的負担への配慮として担当教員の連絡先を提示した。

【結果と考察】

「日常生活における人前での泣き場面尺度」の探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)の

結果、〈自己開示〉〈負担の蓄積〉〈努力・能力の限界感〉〈自己の失敗〉〈コミュニケーションの不一致〉〈他者からの否定・叱責〉の 6 因子が抽出された。

構成概念妥当性の検討として、自作尺度と日本語版 BEQ および日本語版 DERS の各下位因子との相関を分析した結果、いずれの因子間にも有意な正の相関が認められたが、相関係数は全般的に弱い値にとどまった。このことから、本尺度は泣き行動の特性をある程度反映している一方で、個人差を正確に測定する指標としての信頼性に課題がある可能性が示唆された。今後は項目内容や因子構造の改善が必要であると考えられる。

さらに、泣くことに対する信念が泣きやすさに及ぼす影響を検討するため、日本語版 BACS の下位因子を説明変数、自作尺度の各因子を目的変数として重回帰分析(強制投入法)を行った。その結果、「個人的無益」が「日常生活における人前での泣き場面尺度」の全下位因子に対して有意な正の影響を示した。具体的には、【自己開示】($R^2 = .07$, $\beta = .30$, $p = .007$)、【負担の蓄積】($R^2 = .12$, $\beta = .42$, $p < .001$)、【努力・能力の限界感】($R^2 = .18$, $\beta = .48$, $p < .001$)、【自己の失敗】($R^2 = .18$, $\beta = .49$, $p < .001$)、【コミュニケーションの不一致】($R^2 = .27$, $\beta = .61$, $p < .001$)、【他者からの否定・叱責】($R^2 = .19$, $\beta = .49$, $p < .001$)であり、いずれも中程度の影響を示した。この結果は、「泣いても意味がない」と考える者ほど人前で泣きやすい傾向があることを示しており、涙が自己回復行動として用いられるというよりも、他の感情対処手段が乏しいために、最終的な感情表出手段として機能している可能性が示唆された。

【主な引用文献】

橋本 巖・澤田 忠幸・松尾 浩一郎・武知 幸恵 (2006). 青年期における泣きの対人的表出制御と関連要因の検討—「ひとりになって泣くこと」と「他者の前で泣くこと」—愛媛大学教育学部紀要, 53 (1), 45-55.

【指導教員：生塩詞子】